平成３年度　国立大学・学部附属学校等教官海外教育事情視察派遣（Ａ団）に参加して

－訪問国（アメリカ・ドイツ・フランス）の概況と学校訪問－

浜　田　裕　三

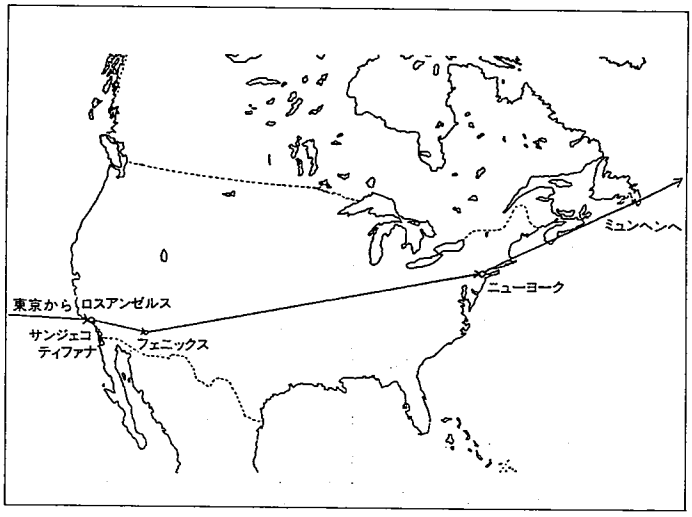
Ⅰ　は　じ　め　に

百聞は一見にしかず。これが我々Ａ団の多くの人が口にした、旅行後の感想であった。最近は海外の情報も数年前とは比較にならないほど早く多量に知ることができるようになって、見ると聞くとでは大違いということはなかったが、直接見たり聞いたりすることの重要性を改めて実感させられた。でかける前に一番心配だったことは言葉の問題であったが、少ない言葉でも気持は通ずるもので、やはり同じ人間同志だという安心感を持つことができた。そうは言うものの、言葉が通じあえればもっと理解が深まり、国家間の争いも少なくなるであろうことも予測できた。それは、言語は文化や民族を表現しているという点や、国民性と言語は密接な関係にあるというあたりまえのことが、納得できたからである。私にとって一番の収穫は、たくさんの学校訪問ができたことであり、そこから学ぶことも多かったことである。日本の教育内容や施設設備の平均した水準は最も高いと思えたが、世界の中で現在の日本の置かれている立場を考えるとき、今後の日本の教育のあり方において見直すべきことも多いことに気がついた。

Ⅱ　行程及び日程

今回の派遣団は、10月25日から11月18日までの25日間、主要訪問国アメリカ、ドイツ、フランスの３ケ国を研修するのがねらいであり、行程及び日程は下記のとおりに行なわれた。学校訪問はひとつの国で各班がそれぞれ３校ずつ計９校で全部合せると27の学校におよんだ。校種も、幼稚園、小学校、中学校、高校、養護学校とたくさん訪問することができた。予定通り研修を終え、11月18日の午後成田空港に到着した。

図1.　視察コース



Ⅲ　各国教育事情視察報告

1. アメリカ合衆国

10月25日午前9時半に文部省に集合し、最終打ち合せと旅立ちの準備をする。あいにくの雨模様の中、文部省を出発し成田へとバスで向う。夕刻5時35分、JAL062便にてロスアンゼルスへと飛び立った。到着したのはその日25日の午前11時であった。日付変更線を越えるとは、まことに奇妙なものである。時差ぼけを克服しようと、ロスのダウンタウンへむかうまでの車中を耳と目をしっかり開いて頑張ったが、実に長い長い一日であった。学校訪問地であるアリゾナ州フェニックスの空港では、樹齢（？）150年といわれる柱サボテンにむかえられ、はるばる西部へやってきた実感がわいた。

(1)　フェニックスの概要

アメリカ西部、アリゾナ州の州都で、柑橘類・綿花・野菜など豊かな灌漑農業地帯における輸送・商業の中心地である。砂漠都市特

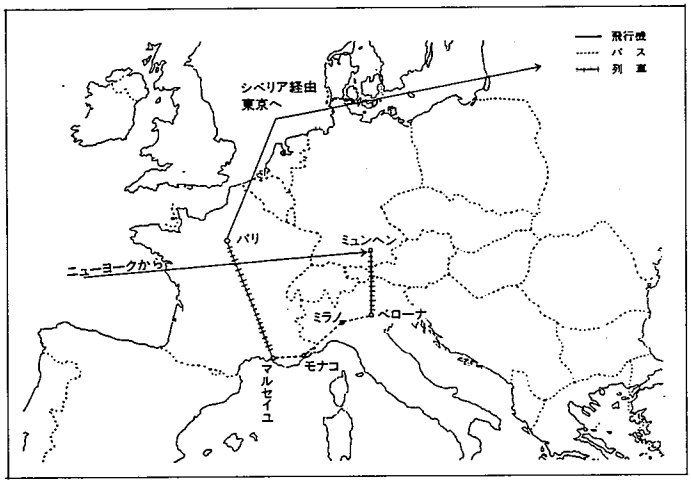


図2.　日　　程

日数	月日(曜日)	都市名	現地時間	交通機関	摘要	宿泊地
1	10月25日(金)	東京発 ロスアンゼルス着	17：20 11：10	JL 062	教育文化施設等視察	ロスアンゼルス
2	10月26日(土)	(カリフォルニア州) ロスアンゼルス			グループ視察	ロスアンゼルス
3	10月27日(日)	ロスアンゼルス発 フェニックス着	12：05 14：15	DL 1792	移動	フェニックス
4	10月28日(月)	(アリゾナ州) フェニックス (PHOENIX)			事前研修 人口：79万人	フェニックス
5	10月29日(火)	フェニックス			学校訪問	フェニックス
6	10月30日(水)	フェニックス			学校訪問	フェニックス
7	10月31日(木)	フェニックス発 ニューヨーク着	11：50 18：20	TW 730	移動	ニューヨーク
8	11月1日(金)	(ニューヨーク州) ニューヨーク			教育文化施設等視察	ニューヨーク
9	11月2日(土)	ニューヨーク発	17：00	LH 409	移動	機中
10	11月3日(日)	ミュンヘン着	08：05		教育文化施設等視察 人口：129.4万人	ミュンヘン
11	11月4日(月)	(ドイツ) ミュンヘン (MUNICH)			事前研修	ミュンヘン
12	11月5日(火)	ミュンヘン			学校訪問	ミュンヘン
13	11月6日(水)	ミュンヘン			学校訪問	ミュンヘン
14	11月7日(木)	ミュンヘン発 ベローナ着 ベローナ発 ミラノ着	09：01 14：53 16：00 18：00	列車 (446km) バス (157km)	移動	ミラノ
15	11月8日(金)	(イタリア) ミラノ			教育文化施設等視察	ミラノ
16	11月9日(土)	ミラノ			グループ視察	ミラノ
17	11月10日(日)	ミラノ発 マルセイユ着	09：00 16：00	バス (504km)	移動	マルセイユ
18	11月11日(月)	(フランス) マルセイユ (MARLSEILLE)			事前研修 人口：87.9万人	マルセイユ
19	11月12日(火)	マルセイユ			学校訪問	マルセイユ
20	11月13日(水)	マルセイユ			資料等整理	マルセイユ
21	11月14日(木)	マルセイユ			学校訪問	マルセイユ
22	11月15日(金)	マルセイユ発 パリ着	08：44 13：39	TGV (866km)	移動	パリ
23	11月16日(土)	(フランス) パリ			教育文化施設等視察	パリ
24	11月17日(日)	パリ発	19：10	JL 406	移動	機中
25	11月18日(月)	東京着	14：55			

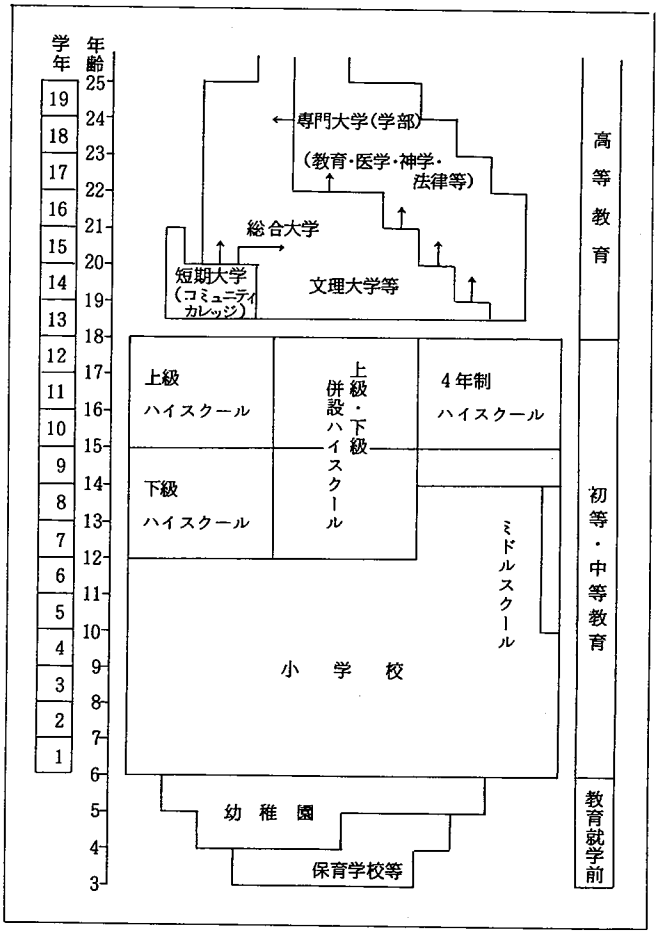
JL：日本航空　DL：デルタ航空　TW：トランスワールド航空　TGV：フランス高速鉄道
LH：ルフトハンザドイス航空　AF：フランス航空

有の澄んだ空気と温暖な気候とに恵まれ、アメリカ有数の保養・避寒地として知られる。乾燥した気候のせいか、ホテルやバス移動の窓から見られる夕焼けはたいへん美しかった。1870年に開拓され、1911年にソルト川開発計画によりルーズベルトダムが完成してから急速に発展して、農業が大規模化した。地名はホホムカインディアンが優れた文化を残したまま消滅した地に建設されたため「不死鳥」と名付けられた。

(2) 学校教育制度

アメリカの教育制度は、地方分権的教育行政機構の中にあって、州や地方学区にその決定の権限が与えられている。我々の訪問地はワシントン小学校学校区（Washington School District）で、アリゾナ州最大の学校区で児童数23000人、32校で構成されている。全米には約16000の学校区があり、それぞれの最高責任者が、任期4年で公選された教育委員の中から互選される教育委員長である。この教育委員には、無報酬で地方の知識人が選出されている。教育委員の役割は、教育長を雇用しその経営手腕や指導力を評価する。教育長は、各校の校長を雇用し校長としての業績を評価する。校長は教員を雇用し、その指導力を評価するのである。評価できるということは、首のすげかえも出来るということなのである。一般市民や両親の意見が反映されやすい面と契約社会の厳しさが表れている点が特徴的である。逆にこの制度の欠点は、教師の雇用システムや給与が不安定であることなどがあげられるだろう。

図3.　アメリカ合衆国の学校系統図



アメリカの就学制度は州によって異なる。我々の訪問したアリゾナ州は、6・2・4制であった。全米の18.2%の学校区がこのタイプであり、6・3・3制は18.9%の学校区で採用されている。従って義務教育年限も州によって異なり、アリゾナでは6歳から13歳までの8年間であるが、高校卒業まで授業料、教科書が

無償である。また、週5日制で学年末から新年度まで3カ月あるので、年間授業時数も平均180日ぐらいである。日本は現在240日ぐらいであるから、月1回の土曜休業ぐらいではなかなか差は縮まらない。しかし、教育委員長の話によれば、日本と逆方向の日数増加を検討中で「できるだけ日本に近づけたい」との意向であった。

中学校、高等学校の教育課程は、必修科目が少なく選択科目が多くなっている。選択科目には日本のクラブ活動にあたるものが見られ、生徒の能力や適性に応じようとする姿勢がうかがえた。ただし、最近「優れた生徒だけを特別学級に入れて指導することは、教育平等の精神から考えて憲法違反である。」との判決がアメリカ最高裁から出された。従って、遅れた生徒を救う補習を行なうクラスはあるが、試験の結果によって能力別編制のクラスをつくることはしなくなった。1クラスの人数は25人ぐらいが普通のようであるが、ここワシントン学校区の中学・高校では、30人を越える学級もあり34人が最高であった。

(3) 学　校　訪　問

初めに訪問したのは、ワシントン小学校区の委員会の建物と隣接しているRichard E. Miller. Schoolである。この小学校を訪問してまずびっくりしたのは、平屋建てであることと校舎に窓がないことである。ここフェニックスは砂漠の中に建設された都市であるため、冷房の効率を考えてのことらしく、どの学校でもこのような造りのようである。校長先生はじめ数名の先生方や母親たちの歓迎を受けたが、親と先生方との連係プレーは日本よりかなり密のようである。児童会長と副会長にキンダークラスから高学年までいくつかの学級を案内されたが、どのクラスも行儀よく集中して授業を受けていて、意欲的な学習態度に感心した。コンピュータの部屋にも案内されたが、ソフトが実に多く揃っていて、授業はしないが機器やソフトの管理をする人がついていた。日本でもぜひ真似たいところである。また、低学年の児童でも図書館のコンピュータから簡単に情報を引出しプリントアウトしているのには、さすがアメリカだなと思った。さらに、このコンピュータが日立製であり、日本にはないタイプなのには不思議な気がした。

次に訪問したのは、Desrt Foothills JR. High Schoolであった。この中学校のつくりも先の小学校と同じく、まるで倉庫のようであった。最初に案内されたのは学級朝礼であったが、これが実に静かでとくに校内放送が流れると、全員ぴたりと話を中断し放送を聞く姿には感動してしまった。次に、1年生の美人記者にインタビューを受け、学校訪問の目的や、日本の中学生とアメリカの中学生の違いなどについて質問を受けた。彼女の記事は、全米300万部の発行部数を有する新聞らしい。アメリカは、なんでもスケールがでかい。

この中学校の1日のスケジュールは、授業48分、休憩3分で7校時まであり、少々ハードに感じる。ただし、移動は大変すばやく行なわれており、遅刻に対しても厳しく対処されているようであった。また、4校時は1時間半あって、昼食と休憩と授業に千人近い生徒が3分の1ずつ30分ごとに3交代するという、合理的な時間の使い方になっていた。食堂ではセルフサービスになっており、指導の先生が遅い生徒を注意したりするところはどこも同じである。日本の中学校でも、衛生面や時間の節約から考えても教室と食事をする場所の分離は

アメリカの学校風景

リチャード．E．ミラー
小学校

デザートフットヒルズ
中学校

グリンウェイハイスクール

ぜひ望みたい。学習面では、読み書き計算の指導に重点がおかれ、進度の遅い生徒に対する特別クラスもつくられていた。特に、コンピュータや図書館などの設備は充実しており、日本のクラブ的な種類の選択科目もあることなど、個性や能力に応じる教育への配慮が感じられた。ただし、先の新聞記者の生徒の取材時の授業免除のことや、できる生徒のようではあったが、授業中に他の生徒の成績をその教室でコンピュータに入力することなど、疑問に感じる点もいくつかあった。我々の参観した授業は、日本の学校をまねたのかＯＨＰを使用した一斉指導が多かったが、生徒はよく挙手し自分の意見を次々と発表していた。このあたりは国民性の違いでもあろうが、指名されるまで黙って手を挙げており、けっして勝手に発言したりせず、また、他人の意見に耳を傾けて集中して学習する態度には、民主主義の歴史の流れを感じさせられた。生徒たちの底抜けの明るさと人なつこさが、とても印象に残る学校であった。

図4.　アメリカ合衆国の学校の概要

訪問学校	学校名	DESERT FOOTHILLS JR. HIGH SCHOOL
	所在地	3333 W. Banff, Phoenix, Arizona
	創立	1984－85
	校長名	Kenneth Wamsley
教職員	校長を除く教員数	男 25 名　女 33 名
	事務職員数	4 名
	その他の職員数	20名
	週当りの授業時数	30単位時間
	一日の勤務時間数	7：30から4：30まで9時間
児童生徒数	在籍数	1,034名（男子516, 女子518）
	学年数	2
	学級数	
学校行事等	年間授業日数	176日
	週間授業日数	5 日
	週間授業時数	35
	年度開始・終了	開始9月3日　終了6月4日
	休業期間	合計21日/年
	主な年間行事	
教科	必修教科	英語、読書、数学、社会、理科、体育
	選択教科	美術、音楽、外国語（フランス語かスペイン語）、コンピュータ
施設	普通教室数	66教室
	特別教室数	
教科書	選択責任者	The librarian
	検定の有無	有
	有償・貸与・無償	無償
その他	男女共学の有無	㊒　無
	学校給食の有無	㊒　無
	ＰＴＡの有無	㊒　無
	職員組合の有無	㊒　無
	上級学校への進学率	100%

2. ドイツ

アリゾナから飛行機でニューヨークへと移動し、ニューヨークでのハプニングに富んだ楽しい研修を無事終えて、一路ミュンヘンへと向った。ミュンヘン空港に降立つや、すみ切った空気のすがすがしさに心も洗われるような気がした。バスで街並木の間を通っていると、建物や木々の緑の美しさにますます心を奪われてしまった。ニューヨークからやってきたからであろうか。歴史の重みのせいか、どことなく静かで落着き払っていて、風格すら感じる都市である。初日の見学であったが、ドイツ博物館の展示物のすごさといい、マリエン広場の仕掛け時計と

いい、かつての科学技術や文化の偉大さと、それに誇りを持つドイツ魂を感じた。

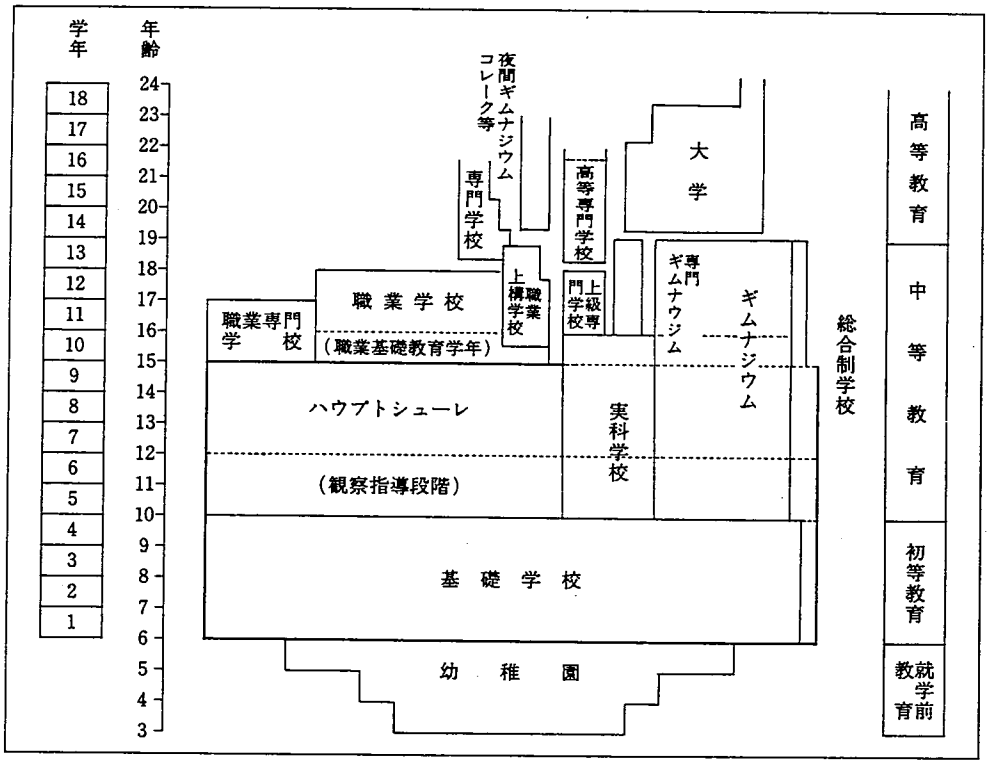
(1)　ミュンヘンの概況

ミュンヘンは、旧西ドイツ南部に位置しバイエルン州の州都である。人口約130万、同国南部における経済・文化の中心地であり、交通の要衝でもある。ミュンヘンといえばビール醸造業が有名であるが、他にも精密機械・電気・化学機械・陶磁器工業も発達している。ミュンヘンは、ドイツの中でも生活や教育の水準が高いため移り住む人も多く、特に東西ドイツの統一から人口は急激に増えつつあるようである。また、トルコ人など外国人の移住も多いようで、社会的に大きな問題となりつつある。学校現場においても、言葉の教育や宗教的な違いなどむずかしい問題がおこっている。近い将来、日本でも深刻な問題に発展すると思われる民俗的な対立意識が、すでに子供たちの間でもおこっているようだ。

(2)　学校教育制度

西ドイツの教育制度は、憲法にあたる基本法（Grundgesetz）により、教育制度の立法、組織、行政に関する権限を11の各州に委ねられている。それぞれの州は、特色ある教育政策をとっているが、各州の教育制度の調整・統一に大きな役割を果しているのが、11州の文部大臣によって構成される常設各州文部大臣会議である。これらの文部大臣が連絡を相互にとり、各州の内容の統一化はかるための州間協定が結ばれ、それが現在のドイツ教育の基本的

図5.　ドイツの教育制度



な枠組みを定めるものとなった。1973年に連邦・各州教育計画委員会により就学前教育から高等教育・継続教育まで含む包括的な「教育統合計画」が策定されたが、各州がそれぞれの教育制策を立案・実施し、文部大臣会議において連絡・調整をはかる体制にかわりはないし、これが最大の特色のひとつであるともいえる。

就学義務は満6才に始まり、9年間であるところは日本と同じであるが、基礎学校（Grundschule）が4年間であり、基礎学校終了時に進路が決定されてしまうところが日本との大きな違いであろう。その進路決定は、4年間の内申書、テストの結果、親の意見等を含めて児童の能力・適性に応じてなされ、基幹学校（Hauptschule）、実科学校（Realschule）、ギムナジウム（Gymnasiumu）のいずれかの中等学校に進学する。そのほか小数ではあるが、地域によっては総合制学校（Gesamtschule）が設けられている。ギムナジウム以外の学校は卒業後、就職や職業学校に結び付いているが、ギムナジウムを修了すると大学入学資格（アビトゥア）が取得できる。この大学入学資格を得るのは、全体の20%にすぎない。このように小学校4年生段階で将来の進路まで決まってしまうシステムはたいへん厳しいが、もちろん第5・6学年は「観察・指導段階」として進路相談や進路変更などきめこまかに行なわれている。ただし進路変更、例えば実科学校からギムナジウムへ移る場合は、2日間にわたる厳密な試験を受けなければならない。ミュンヘン市はバイエルン州全体から見ると、ギムナジウムへの就学率は高く、これは都市部における傾向のようである。また、基幹学校では外国人労働者の子弟が多いということであった。

(3) 学　校　訪　問

ニューヨークでの緊張した日々に比べミュンヘンでの安心した滞在3日目、いよいよ学校訪問である。我々1班は、基礎学校であるGrundschule an der Dieselshabeへと向った。驚いたのは、ドイツでは学校は午前中しかなく、午後1時ごろ帰宅し昼食を家族と一緒に取るということだ。我々が訪問したのは午後だったため、生徒がいなくて静かでやや暗い校舎内であった。しかし、この校舎内の暗さは、ドイツ人の節約の精神の現れで必要のないところでは電気をつけないからということであった。女性の校長先生の話で興味を持ったのは、道徳の時間が週3時間あるということであった。これは、もともと宗教教育（キリスト教）の時間でカトリック・プロテスタントの宗派別に指導が行われ、それ以外の宗教や無宗教の児童に対して道徳教育がなされているとのことであった。この時間は協会から僧侶が来校し指導するが、道徳だけは校長がおこなうとのことである。ドイツが変わりつつあるといえども、協会の力が強く学校教育に影響を与えているのだが、道徳教育はたいへん難しいし週3時間は多いとの校長先生の嘆きであった。さて、次の日は7年生（12才）から10年生（15才）までの4年間を

ドイツにて

就学期間とするRicarda Huch Realshuleを訪問した。理科の授業を参観させていただいたが、手を上げて盛んに発表しとても真剣な学習態度であった。実科学校ということもあって、日本の中学と違って職業的な内容の学習やコースが存在する。例えば、タイプライターや簿記などの教科や、セールスマンや銀行マン、あるいは薬局や税務署の見習などのコースに分かれたりする。選択教科としては、いずれも学校選択らしいが卓球や柔道の科目がある。この学校の現在の問題点としては、外国人とドイツ人との対立とか、女子校から男女共学になってマナーが低下した点などがあると校長先生は語っておられた。やはり生徒がいたせいか活気があり、しかも、生徒たちがやけに大人びて感じたのは私だけであっただろうか。

午後からは、いよいよLuitpid Gymnasiuumの訪問である。がっしりとした体格のフロインドル校長に出迎えられ、力強い握手でこちらの手が痺れてしまう。他の先生方は午前中で終るが、私は日本人のように仕事と結婚し、1日17時間働いていると冗談まじりに話す校長だけあって、とても精力的で熱弁に圧倒されてしまう。ギムナジウムは、5年生（10才）から13年生（18才）までの成績優秀者の学校である。さすがに校舎は広く、天井の高さや廊下の幅も日本の学校とは比べものにならない。約5mの廊下には大きな木製のロッカーがずらっと並び、吹き抜けのホールでは集会や演劇が行なえる面積がある。天井や廊下の壁は生徒の描いたたくさんの絵画で埋められ、だまし絵などもあって結構楽しい。生徒がほとんどいなかったため学校の雰

図6.　ドイツの学校の概要

訪問学校	学校名	Luitpld−Gymnasium
	所在地	Nunich Geswauy
	創立	1891
	校長名	Dr. Otto Freundl
教職員	校長を除く教員数	男 52 名　女 30 名
	事務職員数	1名
	その他の職員数	7名
	週当りの授業時数	22単位時間
	一日の勤務時間数	8:00から13:00まで5時間
児童生徒数	在籍数	1,030名(男683名女347名)
	学年数	9
	学級数	30
学校行事等	年間授業日数	174日
	週間授業日数	5日
	週間授業時数	30
	年度開始・終了	開始9月10日　終了7月29日
	休業期間	5回　合計75日/年
	主な年間行事	スポーツ大会、サマーフェスティバル、スキー週間、コンサート、遠足
教科	必修教科	ドイツ語、英語、フランス語、ラテン語、化学、物理、地学、地理、歴史、宗教、スポーツ、家庭経済
	選択教科	スペイン語、演劇、オーケストラ、合唱、写真、フェンシング
施設	普通教室数	30
	特別教定数	21
教科書	選択責任者	Herr Hebing
	検定の有無	有
	有償・貸与・無償	無償
その他	男女共学の有無	㊒　無
	学校給食の有無	㊒　無
	PTAの有無	㊒　無
	職員組合の有無	有　㊀
	上級学校への進学率	約55%

囲気を充分につかむことはできなかったが、唯一参観できた体育（バレーボール）の授業からは、この学校では体育的な方面には力を入れていないことが推察できた。しかしながら、先の基礎学校でもそうであったが、共働きの家庭の生徒に対してあずかり指導している、いわゆるデイケアの生徒であろうと思われるが、小学生ぐらいの年齢なのにコンピュータ室で自主的にプログラムの作成をしていたのには驚かされた。

この学校では生徒が自由に使用できる有料のコピー機が廊下に設置してあり、それが日本製であったことや、管理棟が別棟になっており、教室棟と比べると廊下がとても狭く階段も急になっていることなど、ドイツ人の合理性が印象に残った。

ミュンヘン市の美しさも見なれ、この町には住んでもいいなと思えるようになってきた。この町への親しみは、ドイツ人がアメリカ人ほど陽気で人見知りをしない性格と違い、静かさと取っ付きの悪さが日本人と似ているからであろう。しかも、酒が入った時のばか騒ぎできる人種と言うのも、共通点がありそうだ。

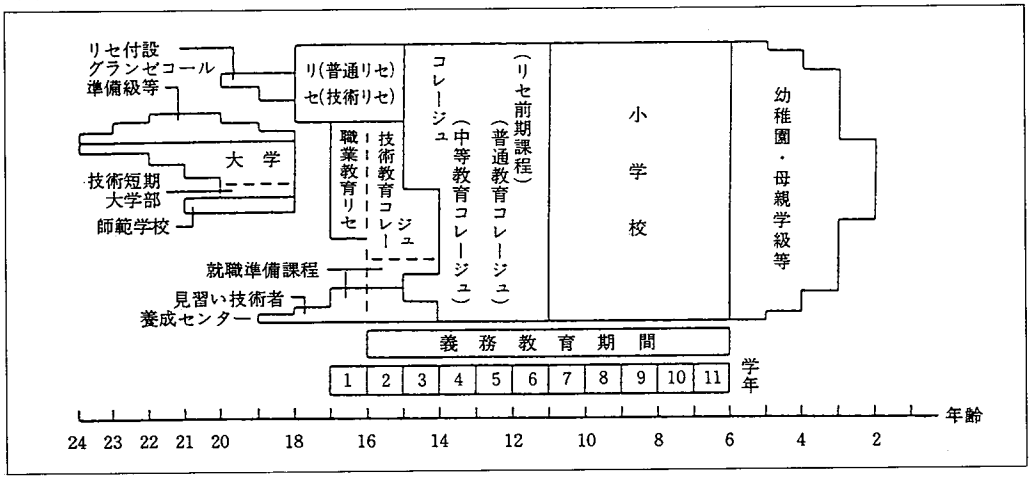
3. フ ラ ン ス

落着いた日々を過した後、ミュンヘン市からイタリアへと列車の旅に出た。ああ、イタリアへとやってきたなと実感したのは、空気の濁りからである。におう空気があると感じたのは、ボートのレースに出場するために戸田コースを訪れた時であるが、今回は空気には色もあるんだということを発見した。イタリアからはバスでコートダジュールやモナコ王国をめぐって、フランスはマルセイユに到着した。

(1) マルセイユの概要

マルセイユは、フランス南東部のパリから770 kmの地中海沿岸に位置し、人口約110万の都市圏を形成している。造船・石鹸・アルミニウム・食品・繊維などの各種工業のほか、近年郊外のBerre 潟湖周辺に石油化学工業が発達している。この町は、現在ヨットやクルーザーの保留地となっており、避寒地として観光客がたくさん訪れるようだ。船着き場の海岸では、毎朝新鮮な魚介類の市が立ち、昼過ぎまで人々でにぎわっている。港を見降ろす丘陵

図7. フランスの学校系統図



には、ノートルダム・ド・ギャラド寺院が天空をさしてそびえたち、風情をかもし出す堅固な石造りの町並みや人々の暮らしを見守っている。この港から観光船で30分足らずのところに、デュマの小説のモデルとなったイフ島が群青色の海に浮かんでいる。初めてこの地に足を踏みいれた私にはわかるはずもないが、添乗の太田さんの話では、２～３年前と比べてアフリカかと見間違うほどアラブ人が増えているそうである。そのせいか近年治安も悪くなったとのことであった。

(2)　学校教育制度

フランスの教育制度は、国情の変化、国民の強い期待と要望等によって、この40年余りの間に数度にわたる教育改革がなされている。今回、1989年７月10日制定の法律（ジョスパン法）に基づく教育指導要領の改訂時に当たり、ちょうど新制度による教育がなされようとしているときであった。すべての児童・生徒が社会的に認められるレベルまで学力向上を目指すことを中心に、障害者教育、移民者の教育等、現在フランスの抱えている多様な問題に対応できる学校の再編成などが、改訂の主旨となっているようである。マルセイユ視学局の話では、高校卒業資格と大学入学資格を認定する「バカロレア」の合格率を、80％までに引き上げることを協調しておられた。

ドイツ・リッカルドクーフ実科学校

フランスの教育は、「実力主義」「資格主義」をとっており、成績によっては原級留置という処置が取られる。日本流に言えば落第であるが、考え方を変えればきちんとわかってから進級する、つまり個の進度や適性に合った指導と言える。とにかく日本にはない制度であるが、この制度の実際について少し詳しく説明してみる。

小学校からの卒業生（日本での５年生）は、全員中学校へ入学できる。中学校での１年から２年への進級は自動的に行われるが、担任は生徒に対し留級を勧告することができる。しかし、保護者及び生徒にその気がなければ拒否し、進級することができる。実際には５％程度の留級者がでるようで、３年から４年生の場合も同程度のようである。そして、２年から３年生への進級においては、それまでの成績と試験の結果如何によっては、担任は留級勧告でなく進級を拒否することができる。この決定に不服の場合は、担任、家族代表、校長、校医代表、進路指導

図8.　日　課

	小　　学　　校
日課	8:30～11:30（３時間） 11:30～14:00（昼休み） 14:00～17:00（３時間） 17:00～18:00（補　習）
	中　　学　　校
日課	8:30～12:30（４時間） 12:30～13:30（昼休み） 13:30～17:00（３時間） ※１単位時間55分

※　基礎学力教科としての国語、算数の学習に多くの時間を割き、原則として午前中に行う。体育及び総合学習は午後行う。

アドバイザー、アシスタントソシアル（相談員）等で組織された判定委員会に訴えることができるが、この委員会の決定は絶対である。この学年での留級者は10～20％いるとのことである。４年末の卒業時には進路指導が行われ、成績により普通高校、技術専門学校、職業専門学校、職業養成センター等への進路選択を迫られる。ここでも、不服の場合は判定委員会に提訴することができる。また、中学終了資格試験が行われ、３・４年の成績も勘案して修了資格が与えられる。日本の中学生には高校入試という大きな競争の壁があるものの、日本の中学生よりたいへん厳しい４年間といえるかもしれない。

(3) 学　校　訪　問

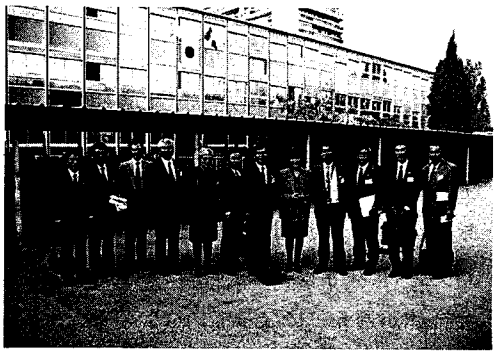
フランス・モンティセリ中学校

バスで約20分近く揺られて着いた先は、アズレー小学校であった。全校の生徒と先生による出迎えで、大歓迎を受けた。プロバンス地方の民族衣裳であろうか。１年生の可愛らしい女の子が着飾って、歓迎の歌をせいいっぱい歌ってくれた。校舎の前で上へ下への大騒ぎと言ったかんじで、女性の校長先生が先生方の紹介をしているそばで、他の先生方や生徒たちも話しかけるなど、騒々しい歓迎の儀が15分は続いた。お喋り好きな国民性なのであろうか。ようやく２人ずつ組になり好きな学年の授業参観をして下さいとの事で、私は２年生の算数の授業を参観させていただいた。教室に入ると、さきほどの喧騒とうってかわって、たいへん静かで真剣な学習態度なのには、さらにびっくりさせられた。

フランスでは各自の家庭へ帰って昼食をとる習慣になっているため、昼の休憩の時間が長く、その分放課の時刻も遅くなっている。午後４時半に保護者が迎えにくるが、校門から一歩も内へ入れないのは学校の権威の象徴であろうか。小学校で親の送り迎えが必要なのは、治安の違いによるものなのであろうか。

翌日の午前にはモンティセリ中学校を、午後にはドーミエ高校を訪問した。100年前のお城であったというモンティセリ中学校は、いかにも落着いた内部の造りが印象的であった。しかし、建物の施設や設備は今まで訪問してきたアメリカやドイツと比べて見劣りするものであった。午前中の授業は２時間の連続が２回の４時間分で、３・４校時の間に少し長い15分の休憩がある。このとき生徒たちはどっと中庭に出てきて、我々と初めて対面したわけであるが、みんな人なつこく明るく近寄ってくれた。口々に日本のカメラ会社の名前や、「ニンテンドー」という言葉が出てきたのには、日本のハイテク産業の世界的進出のすごさを思い知ることとなった。次の授業の先生の後について整列して教室にはいる様は、ちょっと中学生とは思えない違和感があった。中学４年生の外国語、すなわち英語の授業を参観したが、すべて英語のやり取りでたいへん上手に会話していた。我々が訪問したということもあって

か、日本の印象についての授業であったが、日本の中学生が抱くフランスやフランス人のイメージよりは、はるかにたくさんのことを知っているようで日本への関心の高さを感じた。ただし、先ほど接した生徒の言葉のように、技術立国ニッポンの印象だけに偏っている気がした。



１班の訪問団

ドーミエ高校は４学年の中学校と併設している学校だけあって、広い敷地と日本と同じような四角い大きな建物であった。この学校では、４年前から選択の授業に日本語教育を取入れているとのことであった。現在の受講生８人が紹介され、日本の大学への留学方法等について熱心な質問を受けた。この生徒たちがたいへんファッショナブルで大人びて感じたのは、私一人ではなかった。

Ⅳ　お　わ　り　に

今回の海外視察させていただいた国はわずか４カ国であったが、今回の訪問によって、国際的な立場で考えられる大きな心の窓を開いてくれたといえそうである。また、言葉の違いは人間性の違いでもあることが、一層はっきりと認識できた。一般的におしなべると、アメリカ人は合理的で話し方も簡潔で論理がわかりやすい。ドイツ人は理論的で、しっかりとした自分の理屈を持っている。フランス人は話し好きで、会話や討論を楽しむ。通訳を通したわずかなコミュニケーションであったけれど、こんな違いもはっきりしてきた。同じ人間だから「あうん」の呼吸で通じ合える面もあるのだが、言葉を理解し合わなければ世界は身近にならない。つまり、もっと外国語に対する教育を考えなければ、国際化は机上の空論に終る気がする。日本の隣国である韓国や中国の言葉に対する教育にも、もっと力を入れてもよいのではないだろうか。

学校教育の制度や施設設備、教育課程や教師などすべてについて点数化し平均を出せば、日本は優れた成績になるような気がする。また、全国一律で同じ教育が受けられる点も、一番のようである。しかしこの点においては、制度の中に、もう少し融通性があってもよいと思えた。ただしこれは制度の問題だけでなく、年齢によってきちんと進級しなければいけないことや、誰もが平等に同じ内容を学習しなければ気がすまない国民性が、改革を難しくしているのだろう。我々が訪問してきた学校の教育課程と、日本の学校のそれとの基本的な違いの一つは、共通履修する科目が少ないことである。基礎的基本的な内容をしぼり、あとは選択科目にすることが多い。まだ日本では

アメリカの中学生と

小学校低学年の社会と理科がなくなった以外は、特に中学校での教科の精選は進んでいない。中学校での選択教科の幅の拡大はよいことであるが、今までの教科の数や生徒の１クラスの人数が減らず、教員の人数や教室などの部屋数が増えないままでの教育課程の編制は、学校現場に益々無理を強いるばかりである。せめて、１クラスの人数を欧米並みに30人以下に押えることが、個性化に対応する教育への早道のようなきがする。現在我が国では週５日制に対する議論が盛んであるが、訪問した国ではすでにすべて週５日であった。しかし、１日の学校での学習時間は日本より多く（中学校では７時間）、休憩も少なくその点では詰込み的である。日本では、いまだ社会全体が週５日になっていないので、学校現場の対応の難しさが残るのであるが、訪問国で休業日が多いことについては、両親の教育方針や家庭の教育を大切にするという基本的立場があるように思った。現在でも週32時間を５日で消化するように１日当たりの時数を増加すれば、週５日制は簡単に実現するわけであるが、家庭教育の考え方をかえなければ塾通よいの増加や社会教育への不満が強まるだけのように思える。ただし、家庭教育の考え方は、日本人の学力観や大学入試制度の変革がなければ変りそうもない。幼稚園から塾通よいが始るのに、大学はレジャーランドのようになっているといわれる日本の現実は、根本的に考え直さなければならない時期にきていると思う。

フランス：アズレー小学校

今回視察した生徒たちの、しっかりと自分の意見を持って発言する学習態度は、ぜひ日本の中学生も身につけさせたいものだと思った。また、他人へ迷惑をかけないことや自分のしたことへの責任は自分でとらせることの徹底ぶりは、見習いたいものである。理科やコンピュータの教育に関しても学ぶことは多く、今後に少しずつでも生かせることを願って、研修報告を終えたい。

最後に、たいへん貴重な経験をさせて頂いた文部省や島根大学関係者各位、ならびに本校やお世話いただいた多くの方々に深く感謝し、お礼を申し上げます。

＜主な参考文献＞

平成３年度　国立大学・学部附属学校等教官海外教育事情視察派遣団報告書（Ａ団）